

令和 4 年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視 点	4 年間の目標 (令和 2 年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 ( 1 月 10 日実施)	総合評価（3 月 17 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①新しい時代を築く『人間力』を学力の側面から育成する教科指導を展開する。 ②「総合的な探究の時間」の研究開発等をとおして、次代に求められる資質を常に見極め、人材の育成につなげる教育活動を推進する。	①生徒に身に付けさせたい「学力」や適正な評価の研究と明確化を進めるとともに、新「学習指導要領」の円滑な運用に向け教育課程の研究を続ける。 ②教科内での議論の深化と、プロジェクトチームを中心とした、教科横断的な「学び」の研究を進める。	①・本校生徒に必要な学習内容を精選し、生徒に身に付けさせたい学力を意識した教科指導を展開する。 ・国や県の動向を踏まえ、オンライン授業や適切な評価の在り方を研究し、校内での統一を図る。 ・新教育課程の開始に伴い、カリキュラム・マネジメントの視点から、本校の育てたい人物像を意識し、具体的な教育活動の方針を確立する。 ②「総合的な探究の時間」を中心に、各教科において、課題発見力を育成する。	①・年間指導計画の適切な見直しを図り、実践することができたか。 ・国や県の動向を踏まえ、オンライン授業の研究を行い、適切に評価をすることができたか。 ・学校目標を達成するための教育活動の計画が策定できたか。 ②・目標に沿った適切な課題設定ができたか。 ・「情報収集・分析」、「課題の分析・考察」をする学習ができたか。 ・課題の解決提案を通して、生徒間による相互評価の力を育成できたか。	①新学習指導要領の開始に合わせ指導と評価の計画を各科目で作成し、学習内容を精選し、授業を展開した。新しい評価方法についても、校内で研修会を開くなど、評価に関する考え方や、具体的な評価方法について意思の統一を図った。 ①「総合的な探究の時間」で探究的な学習方法を学ぶことで、他教科での学習方法に探究的な手法を取り入れることができた。	①旧学習指導要領旧から新学習指導要領への移行期であるため、引き続き新学習指導要領の内容や評価方法の意思統一を図る必要がある。 ①「総合的な探究の時間」の研究指定校として、今後も新たな取組みを続けていく必要がある。国や県の動向を踏まえ、生徒同士の話し合いや発表の機会を増やす必要がある。	(校内評価アンケート) ① 4 段階 3 以上：生徒 94%、保護者 89%、2 以下：生徒 4 %、保護者 11% ② 4 段階 3 以上：生徒 88%、保護者 85%、2 以下：生徒 12 %、保護者 15%	①新学習指導要領によって始まった新教育課程の 1 年目として円滑に移行することができた。3 年間かけての完全移行であるため、来年度、再来年度と新しい試みは続く。今後 2 年間はまったく新しい科目の授業を行うことになるので、教師の自己研鑽も重要である。そのために、引き続き校内研修を行うなど、新学習指導要領への理解を深める活動を校内で行う必要がある。特に評価方法については教科内で統一ができるよう、校内での情報共有を強化する。 ②「総合的な探究の時間」では研究発表の拠点校として他校とも連携しながら学習を進めてきた。今後も他校の内容を参考にしつつ、探究的学習方法の定着に向けた取組を続けたい。	①新学習指導要領による学習方法を全職員が理解できるよう、文部科学省国立教育政策研究所作成の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を各教科に配付し、全職員が参考にできる環境を整える。また、その内容が生徒に身に付けさせたい学力につながるよう、教科内で議論できる場を提供する。 ②「総合的な探究の時間」における学習方法の定着に向け、引き続き授業の複数担当を継続する。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①新しい時代を築く『人間力』を人格形成の側面から育成する教科外指導を展開する。 ②一人ひとりが豊かな人生を切り拓くために、それぞれの『生き方』や人としての在り方を学ぶ教育活動を推進する。	①学校行事の目的を明確化し、コロナ禍での実施方法を再検討し生徒に充実した学習機会を提供する。 ②・人としての「在り方」「生き方」を考えさせる指導を通して、自他を尊重し、人として備えるべき資質を身に付けさせる。 ・教育相談体制の更なる充実を図り、実践を重ねる。	①生徒会や委員会等の生徒が中心となり、感染症対策や施設制限を配慮しながら生徒が協働できる機会をつくる。 ②・遅刻指導等の日常的な指導を徹底し、道徳観や規範意識を高めること。 ・人権研修等を通じ、自尊感情を育み、また多様性を認める意識を醸成する。 ・面談、生活状況調査を通して、生徒の“困り感”に対応する。	①生徒主体の生徒会行事を企画・運営ができたか。（アンケート） ②・遅刻指導対象者数を減らすことができたか。 ・道徳観や規範意識を高めることができたか。（人権講話後アンケート） ・面談、生活状況調査を適切に実施し、組織的に対応できたか。	①できる限りの感染対策を講じながらも充実した学校行事を企画・運営することができた。 ②・年間の遅刻指導対象者数は、1 年生 2 名、2 年生 10 名、3 年生 64 名。1、2 年生は対象者数を減らすことができた。 ・日常の指導で道徳観、規範意識を高めることができた。（人権講話後アンケートは年度末に実施） ・2 者、3 者の面談を年間 3 回実施。生活状況調査	①用具等の劣化も確認して、安全な行事運営を行う。次年度のガイドラインに従って、また新たに検討し企画する。 ②・3 年生の遅刻者が多いのが課題。1 年次からの継続的な指導の徹底で改善を図りたい。 ・日常的な指導は継続していかなければいけない。人権講演会については、年度ごとに視点を換え、生徒の視野を広げたい。 ・今年度並みに面談、生活状況調査を実施したいが、	(校内評価アンケート) ① 4 段階 3 以上：生徒 99%、保護者 92%、2 以下：生徒 1 %、保護者 8 % ② 4 段階 3 以上：生徒 96%、保護者 93%、2 以下：生徒 4 %、保護者 7 % ② 4 段階 3 以上：生徒 96%、保護者 90%、2 以下：生徒 4 %、保護者 10%	①多くの学校行事において委員会や生徒会本部の生徒が中心となり、また P T A の大きな協力のおかげで、感染対策を講じて制限のある中でも多くの生徒が満足する行事を行うことができた。②・人としての「在り方」「生き方」に通じる道徳観や規範意識は全般的に身に付いている。しかしながら、受験期を迎えた 3 年生の遅刻者が多いのが課題。また、年間を通して近隣からの登下校マナーに関する指摘は少なくはない。 ・2 者 3 者面談を 3 回実施できたことにより、問題の未然防止ができた。また、カウンセラー、養護教諭、教育相談コーディネーターが連携し、組織的に問題の未然防止が図られた。次年度に向けて、教育相談コーディネーター不足が課題である。	①感染症対策をどこまで行うかなど、絶えず検討することが課題であるが、生徒がより充実できるよう P T A や地域の方々と協力して企画・運営にあたる。 ②・特に受験期である 3 年生の遅刻指導の徹底が必要である。学年団として、基本的な生活習慣を 1 年次から継続することが大切である。 ・イベント的な取組だけでなく、日常的な声掛け指導の重要性を認識して、指導していくことが必要。 ・年間 35 週の授業確保の問題はあるが、問題の未然防止のために今年度並みに面談、生活状況調査を実施したい。

	視 点	4 年間の目標 (令和2年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (1月10日実施)	総合評価（3月17日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
						を2回実施し、組織的にいじめ等の未然防止ができた。	時間の捻出が課題である。			
3	進路指導・支援	①主体的に自分の将来像を描き出し、『社会的役割』を果たそうとする姿勢の確立を支援する。 ②一人ひとりの進路実現を支え切る指導と支援の体制構築と効果的な実践を図る。 ③「総合的な探究の時間」の研究開発等をとおして、次代に求められる資質を常に見極め、人材の育成につなげる教育活動を推進する。	①望ましい職業観や勤労観を土台にしたキャリア形成を支援する方策を構築する。 ②各教科との連携により、進路指導の観点から求められる学習指導の在り方を追求する。 ③教科内での議論の深化と、プロジェクトチームを中心とした、教科横断的な「学び」の研究を進める。	①社会の一員として働くことの意義に気付かせ、カリキュラム・マネジメントの視点から、本校の育てたい人物像として求められる人間力を養うプログラムを策定する。 ②進路実現に向け、国や県の動向を踏まえ、入試対応や学力の定着に向けて、必要な学習内容を研究し、各教科での実践につなげる。 ③「総合的な探究の時間」を中心に、各教科において、課題発見力を育成する。	①本校の育てたい人物に求められる人間力を養うプログラムを策定することができたか。 ②生徒の理解度や習熟度を課題、模擬試験等で把握し個別対応ができたか。 ③・目標に沿って適切な課題設定ができたか。 ・「情報収集・分析」、「課題の分析・考察」をする学習ができたか。 ・課題の解決提案を通して、生徒間による相互評価の力を育成できたか。	①1年生対象の職業分野別説明会および2年生対象の社会人講話をとおして、社会の中で責任を背負って働く意義を考え、自分の将来像を考えさせた。 ②通年をとおして対面による授業が実施できたことでが学力の定着が進んだ。3年生においては、不安を少なくして受験に臨むことができた。 ③学年ごとに3年間を見通して、探究のプロセスを踏まえた教材を活用し、課題発見力の育成に取り組んだ。	①次年度の選択科目決定との実施時期を該当グループと調整して今後も続ける。社会人講話も将来の意識付けのために継続していく。 ②対面授業いにおいては各教科で内容深く検討してできてはいるが、対面授業を進めながらのオンライン授業の展開の工夫が課題であると考える。 ③「総合的な探究の時間」においては試行錯誤しながらの実施になっているので、学年間での情報共有を強化する。	(校内評価アンケート) ①4段階3以上：生徒96%、保護者92%、2以下：生徒4%、保護者8% ②4段階3以上：生徒88%、保護者87%、2以下：生徒12%、保護者13% ①3年間を見通した、分野別説明会、進路講演会、三者面談および模擬試験により将来をイメージすることが定着していると考える。 ②学習指導の在り方においては、生徒一人ひとりにたいしても違ってくるので、個々に応じた対応と、40人に応じた対応を考える必要がある。	①高校卒業後の進路や将来像をイメージできるように導くことができたとともに、「社会的役割」を果たし、社会で責任を背負いながら働くことの意義を伝え続けることができた。 ②オンライン授業においても、クラスルームを活用してプリントの配付や解答についても提供できた。質問したいタイミングで生徒と両方向のやり取りの工夫は検討が必要である。 ③「総合的な探究の時間」においては、学年ごとにキャリア支援グループが中心となり3年間を見通した計画を立てることができた。学年間での情報共有は今後とも必要であり、各教科でどう活用していくかも検討し続ける必要がある。	①ある程度の形は出来上がっている。与えることだけでなく、この情報社会において生徒自ら調べていくことができるような投げかけも含めて、カリキュラム開発グループと連携していく。 ②各教科の中では指導方法において深く検討しているので、教科横断した情報共有をしていく必要がある。 ③キャリア支援グループから各教科、各グループに発信しながら教科横断的に進めていくことが課題であるが、まずは学年ごとに計画を進め総括していく必要がある。
4	地域等との協働	①社会の一員としての資質や意識の向上を目指して、多様な人たちとの係わりの中から『生き方』を学ぶ機会を拡充する。 ②学校が「地域でもっとも善良なる隣人」であるために、様々な活動や実践に取り組む。	①「成年年齢」の引き下げ等を視野に入れ、学校や地域等との連携・協働を推進し、教育活動の充実を図る。 ②地域等との更なる工夫ある連携・協働の方法等を検討し、これらの推進を図る。	①②目標達成のための新たな地域等の連携・協働の方法を模索し、連携可能な事業等を拡充し、教育活動の充実を図る。	①社会人としての資質や意識の向上を視野に入れた『生き方』を学ぶ機会の拡充ができたか。 ②新たな地域等の連携・協働の方法を模索し、実践できたか。	①成年年齢の引下げを視野に入れた「金融教育」を行った。 ②新たな地域連携として、地域の学童野球チーム、学童保育園との野球教室を行った。また、地域貢献活動の地域清掃において、新たに学童保育園との連携を行った。	①②成年年齢の引き下げを視野に入れた教育活動及び新たな地域連携事業を行うことができたが、今後も新たな発想を思い描きながら、教育活動・連携事業を模索するため、今後も研究していくことが重要である。	(校内評価アンケート) 4段階3以上：生徒96%、保護者88%、2以下：生徒4%、保護者12% 地域の一員として自覚を約9.5割の生徒が持つことができたと回答しているが、その自覚を持った行動ができていない場面もある。	①②多様な人たちとの係わりの中から『生き方』を学ぶ機会を拡充することや、学校が「地域でもっとも善良なる隣人」であるための取組を実践することにより、生徒の意識をある程度醸成することができた。	①②次年度に向けて、今年度実施した新たな連携事業については、発展させた形での継続実施をしていく。 また、学校目標実現のための連携事業等を模索するため、今後も新たな発想を思い描きながら研究を進めていく。
5	学校管理 学校運営	①すべての人が学び活躍して、成長を続けられる学校づくりを推進する。 ②将来にわたって、社会的な役割と責任を果たすことができる「持続可能な学校」づくりに取り組む。	①さまざまな機会をとらえて、これからの「神奈川の教育」を担うことができる主体的な人材を育成することを目指す。 ②生徒に関わる時間をより多く確保することと教員の健康維持のために学校運営の方法や働き方の改善・改革を推進する。	①校内研修や事故防止会議などで知識習得やディスカッションを行うことで個々の資質向上を図る。 ②長時間勤務の是正を目指し、各教員が業務の精選や見直し、意識改革を行う。 また、意識的・積極的に定時退庁を心掛け月に3回以上実践する。	①個々の資質向上につながる研修や機会を設定できたか。 ②・職員各自が業務の改善を通して長時間勤務を是正できたか。 ・定時退庁を積極的に実践できたか。	①8月に「発達障がい」をテーマとした職員研修を行い、人権意識に基づいた生徒対応の実践を学んだ。 ②衛生委員会の活動などを通じ、長時間勤務是正、ワーク・ライフバランスの実現などを促した。	①職員間のワークショップ的な内容や更なる人権意識の向上につながる研修の実施を目指す。 ②引き続き、勤務時間管理システムなどのデータに基づいて、産業医と連携し、長時間勤務の是正を行うことが求められる。	①人権意識の向上については、次年度以降も引き続き取り組んでいきたい。 ②定時退庁や休暇の積極的な取得に取り組んでもらいたい。	①今年度の目標については、校内研修会や不祥事防止研修会などを通して概ね達成することができたが、引き続き、対生徒や職員間など、人権意識の向上を見据えた学校運営のために、さまざまな視点からテーマを設定し、研修や実践を行っていく必要がある。 ②長時間勤務の見直し、是正については、概ねされてはいるが、まだ一部の職員や特定の業務の負担者に仕事が集まってしまいう傾向があり、その改善解決に一層の努力が必要である。	①職員研修については、学校として必要としているテーマを管理運営グループで複数選び、職員全体に呼びかけ、全体で取り組めるものを設定する。また、職員間のコミュニケーションを密にすることで、事故を未然防止することに努める。 ②引き続き、勤務時間管理システムなどのデータを活用し、基準を超過している職員が産業医との面談などを通じて意識や働き方を改善できるように促す。